

---

# 魔界姫異聞 1

ナナ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔界姫異聞 1

### 【Zコード】

Z5234BA

### 【作者名】

ナナ

### 【あらすじ】

姫様と魔法使いの戦いです。王子様も出て来ます。

昔むかし、ある所に

正確にはアダマンテ5世統治の16年頃、ジニアス王国の宮殿にて物語は始まる。

「なんであんな奴と結婚しなくちゃいけないのよ…」

爆発寸前の声の持主はアダマンテ王の一人娘、エヴァラ王女である。

黙つていれば美少女なのにと言われているが、実際は口を閉じていても気の強そうな目が決して自己主張をやめることはない。

ちなみに彼女は子宝に恵まれてない王の一人娘ということもあって、ワガママに育つてしまつたというありがちな過去を持つ。

「しかしだな、エヴァラ。お前ももう15であるし、そろそろ婿を貰つて余を安心させてくれてもいいのではないか？」

「でも、なんであんな奴なのよ…」

「ヴィトールは悪い男ではないぞ。たしかに見てくれば良くないが、頭は働くしゴーモア感もある」

「“良くない”って、あいつのはそんな生易しいレベルではないでしょ…？」

その一言で、父娘げんかとなるべく聞かないように努めていた従者たちはみな姫の結婚相手の容貌を思い出し、必死に笑いをこらえた。

昔から男は顔ではないと言つ。

しかしヴィトール王子の場合、男は種族でもないとつけ加える必要がある。

なぜならば、彼はカエル人間なのである。

念のため断つておくが、ヴィトールは決して悪い魔法使いなどに呪われたのではなく、自然に人間の体とカエルの頭を持つて生まれたのである。南のモルフィア国ではさほど珍しくない事だが、

まだエルフなどの亜人に対する偏見が残る中央諸国ではバケモノとしか思われない。

その偏見をまったく気にせずにモルフィアと積極的に国交を求めるアダマンテ5世は時代を先取りした賢人と言えよう。

もつとも、時代を無視した阿呆と呼ばれているのが現実ではあるが。

「カエルなのよ、カエル！ それに、おどき話のよつにキスしてもハンサムな王子様になることもないのよ？」

「しかし、エヴェラ」

「私は嫌ですからね。お父様が何を言おうと、私はヴィトール王子だけとは結婚しません」

王女の言葉遣いが急に丁寧になつたのを聞いて、アダマンテは溜息をついた。

こうなると、もはやテロでも動かない事を知つていいからだ。

しかし、それでも王の威儀を保つ必要はある訳であり

「エヴェラ、よく聞け。モルフィアとはもう十年もの国交が続いている。ヴィトール王子とは何度も会う機会があつたが中々の好青年である。お前達の結婚は私もモルフィア王も望んでいることであり、お互いの国のためにもあり、たかが小娘がカエルが嫌いというそれだけの理由で断つていいものではない！」

彼自身は冷静に話そうとしているのだが、いつの間にか声が大きくなり、気がつくと絶叫している。これはアダマンテ王の癖であり、いまやその怒りの対象となつてない限りそれを気にする者はいない。

「でも、お父様」

「“でも”ではない！ 当分の間、部屋から出ることを禁ずる。頭を冷やしておけ」

「ちょっと、お父様！？」

「自分の足で歩いていくか、衛兵に担がれていくか。好きなほうを選ぶがよい。……衛兵！ 早く来ぬか！」

「なによ、お父様の分からず屋！」

そう叫んで、エヴェラはクッショーンを壁に投げつけた。

勿論、この程度で怒りが収まるわけがない。そして“分からず屋”くらいの罵り言葉では王に対する気持ちを表すのにほど遠い。しかし王族である以上、してはならない事と口にしてはならない言葉があることを幼い頃から教えられてきたのだ。

「荒れてるね、姫さま」

突然の声を振り返ると、黒い服を着た老女が、エヴェラが投げたクッショーンを手にして微笑んでいた。

「あなたは――！」

老女の名前を言いかけて、エヴェラは口をつぐんだ。

なぜならば、そこに静かに立っているのはアグネス・ヴァントロープである。

あまりにも恐れられているため、その名を口にする事をタブーとされている魔女なのだ。

彼女に関する噂は、山のようにある。

曰く、生まれたばかりの赤子を食べて寿命を延ばしている。

曰く、東の小国をたつた一つの呪いで滅ぼした。

曰く、魔界の王を従えている。

不思議なことに、噂が多い反面、実際に彼女の悪事を目撃した者は誰一人とはいえないのだ。

もつとも、目撃者がいない事がそれらの噂に拍車をかけているのも確かなのだが

「カエルとの結婚がそんなにイヤなのかい？」

「……」

「じゃあ、好きなのかい？」

「それは――」

実を言つと、エヴェラは王子を嫌つてはいるわけではない。

それどころか、彼女はヴィトールを憎からず思つてゐるのだ。

しかし。

ヴィトールが好きといふ事と、彼がエヴェラの気持ちを確かめないでアダマンテ王に彼女との結婚を申しこんだ事は別である。返事に窮していると、扉にノックがした。

「誰？」

「私は、ヴィトールです。……エヴェラ姫、少しよろしくでしょうか？」

「今はちょっと」

先客がいるから、と彼を追い払おうとして、アグネスが姿を消したことには気づいた。

「いいわ。でも短くしてね」

「失礼します」

南国のモルフィアで育つたせいか、それともジエニスの宮廷で流行している服が自分に似合わないという自覚があるのか、ヴィトル王子は簡素なズボンとシャツを着ていた。

“カエル王子”的な名の通り、彼は半人半蛙である。

猪首、と言うべきなのだろうか、肩から直接生えている頭部はまさしくカエルのそれであった。

また、指の長さは普通の人間の一倍半があり、水かきらしき物もわずかながらある。

「エヴェラ姫」

「はい」

居心地悪そうな彼を、エヴェラは冷たい視線で見つめた。

「その…………迷惑でしたか？」

「“はい”と答えたならどうなさいます?」

「……」

「私のことは放つて置いてください。もうヴィトール様には充分していただきましたから」

「しかし、エヴェラ姫」

「まだ何がありますの？」

「その」

思つてこむ事をうまく言葉にできず、ヴィトールはしばらく酸欠の魚のように大きな口をパクパクしていたが、やがて感情の内圧に耐え切れなくなつたのか、

「エヴォラ、聞いてくれ！　まさかこんな事になるとは思つてなかつたんだ！」

「……どういう事？」

「君の父上と話していたら、二つの間にかそつこつ話になつっていたんだ。だから」

「すべてお父様の思い違いなのね？」

「それは　それは違う！」

「どう違うと言つの？　私との結婚はあなたの本意ではないのでしょう？」

「そうだ。いや違う。つまり」

つまり  
ヴィトールはエヴォラを好いてこる。いや、愛してこると言つべきだ。

しかし、彼女に求婚する勇気と機会に恵まれずオドオドウジウジするばかりで、そんな彼の態度に痺れを切らした王がお節介を焼いて彼を誘導尋問して、当人たちの意志を無視して話を進めてしまつた。

と、こんな事なのだろう。

「だから、君がそんなにイヤなのなら、僕からアダマンテ王に言つて」

「わつこつ話じやないでしょー？」

「じゃあ、どうこう話なんだー？」

「あなたはどうなの？　私と結婚したいの、それともしたくないの？」

「それは

「

したい。

しかし、こんな怒鳴りあいでそれを告げるのは、あまりにも悲しそうである。

「それじゃあ、なんだ。僕にその意志さえあれば、君は黙つて従つて言うのか？

大人しく結婚すると言うのか？」

「誰が……誰がカエルなんかと！」

言うと同時に、エヴェラはその言葉を後悔していた。  
確かに自分はヴィトールと結婚したいわけではない。  
しかし一方で、何がなんでも嫌というわけでもない。

あるいは、ちゃんとステップを踏んで求愛されたのなら、それに応じたかもしれない。

しかし。

父親に勝手に結婚を決められた事や、ヴィトールがはつきりしない事が、エヴェラの感情を逆なでしていた。

そして気がつけば、相手を傷つけることのみを目的とした言葉を口にしていたのだ。

「……そうですか」

その言葉で、ヴィトールの顔から一切の表情が消えていた。

「では、これ以上あなたを煩わさないよつたします。」  
「ひきげんよつた。

王子が去った後、エヴェラはしばらくショックで立ち尽くしていた。

が、やがて怒りが後悔を覆つてしまい、

「なによ、ヴィトールの馬鹿！ あなたなんか、あなたなんかあなたなんか、アグネスの食事になればいいのよ！…」

「ほう、そうかい

「…！」

耳元の声に振り向くと、邪悪な笑みを浮かべた老女がそこにいた。

「姫さまの願い、しかと聞いたよ」

「ちょっと、あれは……」

「もう遅いよ、姫さま。アタシの名前を呼んで願い」としたんだからね」

(衛兵　！)

叫ぼうとしたが、声が出なかつた。

見ると、アグネスが人差し指を自分の唇に押し当てていた。必死に声を出そうとするエヴェラに微笑みかけて、

「スープにしようか、丸焼きにしようか。さぞ美味しいだろ？ねえ」

く、く、く

楽しそうに笑つた。

「と言つても、あの王子さま　瘦せてるからねえ。それには人間用のろくでないモノを食べるみたいだし。半年くらいはしないと食べごりにならないかもね」

どうだね、とエヴェラを見た。

「アタシの小屋はモルフィアの南の森にある。カエル王子がそんなに大事なら、取りに来て『いらっしゃる』。半年は待つてあげるよ」

(え……？)

「それまでに来なけりや、アタシの晩飯だからね！」

そして

気がつくと、エヴェラは部屋に一人きりでいた。  
しばらくは茫然と立っていた。

たつた今、目の前で起きたことを現実として認めたくなかった。

しかし。

(私のせいだ)

それは避けられない事実である。

(私のせいだ、ヴィトールが……)

「……行かない」

(早く行って、ヴィトールを魔女から助けないと)

できれば、王に頼んでモルフィアに騎士団を派遣してもらいたかった。

いや、それよりもモルフィア王に自分の罪を告白する方が早くて確実だろ？。

しかし

それはどちらもアグネスの定めたルールに違反するように思えた。

「……自分で行かないと。自分の力でヴィトールを助けに行かない」と

まずは旅の仕度をして、動きやすい服に着替えて

「待つてね、ヴィトール。必ず助けてあげるから」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5234ba/>

魔界姫異聞 1

2012年1月14日15時54分発行